

いろは文字 鉾くさり (その二十三―ある万葉歌人の系譜)

河尻 成 泰 成

いろはにほへと ちりぬるを 色は匂へど 散りぬるを

わかよたれそ つねならむ 我が世誰ぞ 常ならむ

うゐのおくやま けふこえて 有為の奥山 今日越えて

あさきゆめみし ゑひもせず 浅き夢見じ 酔ひもせず

(ん)

中大兄なかのおほえ (後の天智天皇)

渡津海わたつみの 豊旗雲とよはたぐもに 入日いりひさし 今夜こよひの月夜つくよ 清明あきらけくこそ (巻一―一五)

入日いりひさす頃 浪漫ろまんの海は 旗雲はたぐも朱あけに 丹色にいろの波穂なみほ

豊浪ほうらう幾重いくへ 返照へんせうありと 豊とよの月立ち 地に待つ光

志貴皇子しきのみ (天智天皇の子)

采女うねめの 袖吹うねめかへす 明日香風あすかかぜ 都を遠み いたづらに吹く (巻一―一五)

緑風舞りよふへひぬ 幣ぬいぞ離はなるる 累世るいせいの宮を 彼方そちに遷うつすわ

若うねめき采女うねめか 彼かの日の袖よ 世の風はただ 誰たが為なやこれ

春日王（志貴皇子の子）

あしひきの 山橋の 色に出でよ 語らひ継ぎて 逢ふこともあらむ（巻四―六六九）
恋恋今ぞ ぞを慕ひつつ 尽きぬ心根 音にも出ださな
汝と我なら 乱詩交はさむ 向くや双方 歌に遊び居

湯原王（志貴皇子の子、春日王とは異母兄弟）

月読の 光に來ませ あしひきの 山來隔りて 遠からなくに（巻四―六七〇）
居待ちの月の 望まるるおお 思ひ安けく 來る君待つや
山障へぬまま まさに月明け

安貴王（春日王の子）

秋立ちて 幾日もあらねば この寝ぬる 朝明の風は 手本寒しも（巻八―一五五五）
今朝風が訪ふ 吹き入るはここ この手本冷え えも言はずはて
天の気はああ 秋まだ浅さ されども寒き 昨夜から今朝ゆ

市原王（安貴王の子）

梅の花 香をかぐはしみ 遠けども 心もしのに 君をしそ思ふ（巻二十一―四五〇〇）
ゆらら正夢 目に浮かぶ君 御梅香りし しのに思ふ絵
笑酒に笑まひ 人また梅も 諸人を寄せ 仙香に酔はす

（平成三十一年三月十六日）

天智天皇の子孫が代々万葉集に歌を残した。それを一首ずつたどってみる。

天智天皇てんちてんわう 第三十八代。舒明天皇の皇子。母皇極天皇。六四五年中臣鎌足らと蘇我氏を倒し、大

化の改新を断行。斉明（皇極重祚）没後、六六七年近江大津に遷り翌年即位。万葉集に短歌

四首。

本歌（渡津海わたつみの…） 大和三山歌の一つになっているが、左注でそれに疑問を挟んでいる。

斎藤茂吉は「万葉秀歌」の中で、この『豊』が古代日本語の優秀を示していると言い、歌全体につき、「如是莊大雄巖の歌詞というものは、遂に後代には跡を断った。……」と熱く語っている。第三句、第五句の読みは今日では一般的ではないらしいが、茂吉に従い、今夜はさぞ名月だろう、と解した。

渡津海わたつみ 海の神。転じて海。

豊旗雲とよはたくも 旗のように長く大きくなびいた雲。

返照へんせう 光が照り返すことだが、特に夕日、夕映え。

豊とよの月立ち 地に待つ光ひかり 皓皓こうこうたるまん丸の月が出て、一面を照らすだろう。

志貴皇子しきのみこ 天智天皇の第七皇子。四十九代光仁天皇の父。歌風流麗。卷八巻頭の「權みちりの御歌」

（石いばしる 垂水たるみの上の さ蔽わびの…）を「その十五」で取り上げた。万葉集に短歌六首。

本歌（采女うねめの…） 〓およそ百年間明日香の地にあった宮を、持統天皇は北寄りに移し藤原京とした（六九四年）。寂しくなった明日香の地で往時を思う。

幣ぬせぞ離るる 〓幣は神にささげるもの。都が移ったことを言う。「その二十一」の「幣ぬせ向むかき反かへる」に同じ。

春日王かすがのおほきみ 万葉集にはこの一首のみ。

本歌（あしひきの…） 山橋やまはしは藪柑子やぶかんじ。夏白い花をつけ、秋赤い実を結むすぶ。

山橋やまはしの色に出でよ 山橋やまはしの赤い実のように思いを顔に出しなさい、ではあるが、自分に言い

聞かせて、我慢していなくてももう言葉に出してしまってしまおう、と取る。

語らひ継つぎて 互たがひい言葉を交わし合あっていれば。

音ねにも出いださな 色いろに出でよ 「色いろに出でよ」に応じて 心に秘めていないで言葉に出そう。

湯原王ゆはらのおほきみ 万葉後期の著名歌人。巻四に娘むすめ子との贈答歌多し。カ音を連ねて清冽な吉野の景を叙

した秀歌（吉野なる夏実なつみの河の川淀かはよどに鴨かもぞ鳴くなる 山陰やまかげにして）がある（巻三―三七

五）。万葉集に短歌十九首。

本歌（月読つきよみの…） 万葉集で異母兄の山橋の歌の次に載せているので、ここでもこの歌を選び、

兄弟の歌を並べた。この歌には作者不詳の返歌（月読つきよみの光は清く 照らせれど 惑まどふ情なさけ

に 思おもひあへなくに）がある。

月読つきよみ 月の神。また月の異名。

山来やま隔へりて 遠とほからなくに 山やまがさえぎって遠とほいというわけでもないのですから、のような意

味あじらしい。

安貴王あきのおほきみ 因幡やかみのうねめの八上采女やかみのうねめを娶よめり不敬罪ぶけいざいになった。その時の悲しさを歌った長歌、短歌がある（皇

親故おやのこに死罪しざいを免ゆるれたらしい。巻四―五三四、五三五）。妻紀むすめ女郎むすめは後に家持いけもちに多くの恋歌を

贈たまった（巻四、家持いけもちが返したのは二首だけ）。万葉集に長歌一、短歌三首。

秋立あきたちて 幾いく日もあらねば 秋あきになって（立秋から）幾いく日もたたないのに。

朝明あさけ 明け方。あさあけの略。

市原王いちばらのおほきみ 万葉後期の秀歌人。一本の松ひととせに吹く風を詠よみ（巻六―一〇四二）、他に例を見ない梅

の香かほりを歌うたにしたり、また、一人子ひとりこであることを託かこつ歌もある（巻六―一〇〇七）。

本歌（梅の花…）Ⅱ万葉集で梅が歌われるのは萩に次いで多く、約一二〇首。その中で香りを歌ったのはこの一首だけだという。歌は中臣清麿宅なかとみのきよまるでの宴に招かれての作。

遠けどもⅡ遠いけれども。実際には同じ京内で遠いというほどのこともなかったらしいが。

心もしのにⅡしみじみ、心もしっとり。主人清麿の人柄を称える。卷三―二六六で人麻呂が「情しみじみもしのに」昔を偲んだ。

笑酒あぐしⅡ飲めば笑いを催す酒。「その二十」でも使った。

人また梅も 諸人もろびとを寄せⅡ人は宴の主人。品ある主と梅香うめがかがたぐさんの人を惹きつけ。

仙香せんかⅡ仙界せんがい（仙人の住む清浄なところ）、仙楽せんがく（仙界の妙なる音楽）、仙果せんか（不思議な木の実、桃）などの類推から、妙なる香りをいう。

後記

万葉集を何回かやってきて、さて、歌はたくさんあるとはいえ、どうしたものかと思案。そこで思いついたのがこの代々続く万葉歌人。優秀な血筋の五人、いや、六人に取り組んでみよう
と始めた次第。平成最後の文字鉤となる。

（平成三十一年三月十八日）